

〈本〉と〈草〉 書物と草紙

橋口 侯之介（誠心堂書店）

S 和本には格の違いがあった

江戸時代の本屋というのは、しっかりした本を扱う書物屋と、大衆向けの娯楽的なものを扱う草紙屋にくっきりと分かれていた。

そもそも〈本〉という語は、正統で根源的な存在の本物、根本ということからきている。それに対して格下の遊び程度なのが〈草〉である。根のある大木と根無し草の違いのようなもので、その〈本〉にあたるのが書物であり、〈草〉の側が草紙だった。

十七世紀末の元禄期に京都と大坂でまず〈本〉の側の店が集まって本屋仲間、書林仲間を形成していく。ほかの業種がほとんど享保年間になつてから仲間組織を作っていくのに対して本屋は先行していた。京都では二百軒くらい、大坂では三十軒で組織された。そのとき、〈草〉の側は浄瑠璃本屋と呼ばれて、浄瑠璃の正本をつくって売っていた。まだ細々と数軒があっただけで、組織すらできていなかった。

江戸で書物屋仲間ができるのは、享保の改革になってからである。その後は、むしろ江戸の出版が力をつけていき、十八世紀中頃になると上方をしのぐほどになる。そのときに、江戸の草紙屋も「地本問屋」と呼ばれて独自色を打ち出して成功しはじめた。江戸時代の後期は完全にこの地本屋が業界を席卷して、大量出版をするようになった。曲亭馬琴、山東京伝、為永春水などの人気作家が輩出され、全国すみずみまで浸透していった。

それでも地本屋は、あくまでも〈草〉の側の出版・販売業であり、本屋・書物屋より格下であることには変わりなかった。どれほど人気があるろうと格は格なのである。

この〈本〉と〈草〉の関係は、江戸時代の初期が起源なのでなく、実はもっと古く平安時代までさかのぼることはあまり論じられてこなかったと思う。たしかに時代によって質は異なるので同じに語れないところはある。しかし、その間に何が〈本〉で何が〈草〉だったのかということとを踏まえていくと、変化こそあったが、格の上下はずっと続いていたことに気づくのである。

十一世紀初めから十九世紀までの長い間、格が上の〈本〉を扱う側は、つねに〈草〉の分野を取り込みながら発展してきた。一方、〈草〉の側は、つねに新たな分野を開拓する創造性があった。日本の書物（本も草も含む）は、この関係を維持しながら千年近いの歴史を経てきたのである。私はこのことが書物の歴史にとって重要なことだと認識している。

## § 平安時代の冊子とは

平安時代に何がおきていたのだろうか。それは物語の誕生である。

奈良時代には、大量の写経がおこなわれ、書物は中国から請来されるだけでなく自前のもになっていく。それ以来、書物とは漢文(真名)で書かれた卷子本という不文律があった。中国の基本形でもあったからだ。写経はもとより公卿の日記、勅撰の和歌集、歴史記録など和歌をのぞいて文体は漢文であり、装訂は巻物だった。それが〈本〉のあるべき姿だった。

そこへ仮名書きの物語が誕生した。十一世紀初頭の『源氏物語』はその代表作である。そのとき、物語は卷子にしなかった。『紫式部日記』には中宮様が「御冊子(草子)をおつくりになる」というので、各種の色の紙を選び整えて、物語の元本を添えつつ、方々に手紙を書いて配り、それを集めて綴じる仕事をした、という一文がある。ここでいう御冊子が『源氏物語』のことで、幾人かの能書家に清書を頼み、「綴じる」方式の冊子をつくったのである。

その数十年前に書かれた『土佐日記』の紀貫之自筆本が、十三世紀初頭にはまだあった。それを手にした藤原定家が感激してその様子を書写本の奥書に記したが、軸や厚紙などの表紙がない巻物だったという。ふつうの公卿の日記とは違って、仮名書きの文体で書かれたものだが、十世紀中頃の段階ではまだ紙は継紙にして巻いていくことが当然だったのである。それが『源氏物語』の時代には冊子にした。

空海が唐に留学していたときの勉学の記録を書き記した『三十帖冊子』が最古の粘葉装といわれているが、しだいに継紙を卷子にしないで、一枚一枚の料紙を糊で綴じる装訂が生まれていた。『源氏物語』と同時代につくられた『和漢朗詠集』の、現在宮内庁に伝わる本も粘葉装である。これが冊子本である。

これを草子ともいった。冊子は〈さくし〉と読まれたが、しだいに〈さうし〉ともいうようになった。草子も同じ音の〈さうし〉である。清少納言の『枕草子』も『枕冊子』と書くこともある。後世、草紙とか双紙などと書くこともあるが、同じ読みであって、同義である。

冊子＝草子は真名でなく仮名で書かれた本式ではないものに採用された。卷子にする必要がなかったからである。自由につくればよい。それなら、手に取りやすく読みやすい形のほうが好まれた。卷子は読むためというより、あくまでも保存しておくことを念頭においた装訂である。

平安時代の間、物語は正式な〈本〉ではなく、格下の〈草〉の扱いだったことがこれで理解できる。まだ遊びの入った娯楽的な読み物としてしか扱われていなかった。

## § 中世にも〈本〉と〈草〉

しかし、中世になると位相は変わってくる。藤原定家が『伊勢物語』なども含めて多くの物語や歌集を書写しつつ校訂を行い、いわゆる証本をつくっていくが、そのときすでに平安の物語は「古典」になった。当

時、本流だった仏教の理論書ともいうべき聖教しよきょうがたくさん作られるが、その多くの書籍と同列の〈本〉として扱うようになったのだ。以後、書物にかかわる公家で物語本が重視されて伝えられた。恋愛小説だった『源氏物語』が寺社でも注釈され、書写されていた。

かわりに中世では、唱導文学といわれる分野が〈草〉になった。寺社には学問をする学侶を頂点として、僧兵のような大衆、その下に聖とか神人といわれる非定着民がいて大きなピラミッド型を構成をしていた。その最下層の人たちが、特権を与えられて各地を放浪した。中世の寺社がしだいに民衆教化や救済に向かったことに対応して、説経のような教化のための語りを、身振りや音曲を加えながら広めていった。その題材になったのが本地物やお伽草子などの中世物語である。ただし、まだ紙に書かれた文として確立したわけではない。作者もわからない。琵琶法師が語ったという『平家物語』ですら作者不詳のうえ、各種のテキストがあつて一定しないのはそのためだ。

### § 中世と近世の間

中世の〈草〉は、紙に文字が書かれて綴じられるという書籍の形態をとるとはかぎらない。しかし、厳然と書物の下層に位置していたと思う。それは、この語りの文芸が近世に大きな影響を与えたからだ。

江戸時代の草紙は浄瑠璃の正本が母体である。だから、草紙屋の別名を浄瑠璃本屋ともいった。中世の舞い踊りを人形に託し、三味線の節を

つけたものが浄瑠璃で、十七、八世紀には絶大な人気があつた。近松門左衛門のような書下しが多くなるまでの演目は、ほとんどが中世の物語だった。ただ、江戸時代後期になると歌舞伎の方に人気が移っていく。そのいずれであれ、草紙屋はつねにこの演劇から離れることなく、関係する本を出し続けてきた。錦絵などはまさに歌舞伎役者のプロマイド的役割を果たしたのだった。それが、江戸の地本屋の隆盛につながった。中世と近世がそうしてつながっていることを忘れてはなるまい。

近世の初期には仮名草子が、つぎに浮世草子が書き下ろしの文芸書として出てくるが、まだ〈草〉的な扱いだつた。浮世草子を出した京都の八文字屋などは浄瑠璃本屋である。その後、しだいに本屋が売れる本として、こうした分野にも進出してくるが、もともと本屋というのは、格式をいうことが多く、進取の気質は乏しい。浄瑠璃本屋が演劇と結びついて次々と人気のある新機軸を打ち出すのを、遅れて本屋の側が取り入れていく。江戸時代の後期になって、地本問屋が育てた馬琴や京伝らの作家を読本という形で本屋が参画するのも、そうした流れである。

〈本〉と〈草〉というカテゴリーの違いは、たんに本の種類をいうのではなく、保守的な〈本〉の側が、伝統にとらわれない〈草〉の側の成功を取り込みながら、位相を変えて存在し続けてきた関係にあるのである。書物文化の流れを大きく千年の単位で語ることで見えてくる世界がある。そんなテーマで次の本を書いた。二〇一一年六月に角川書店から出版する。お読みくだされば幸いである。